



日本オリエンテーリングの先駆者・青木弘氏が2008年6月16日にご逝去された。享年75歳。

日本オリエンテーリング黎明期に青木氏から影響を受けた若者のひとり山岸倫也が語る。

日本オリエンテーリングの黎明

青木弘さんと始めて出会ったのは、私が大学に入学した前後のことだと思います。日焼けした顔、独特の語り口、堪能な英語、酒とタバコ。青木さんは40歳代、最もアクティビティの高かった頃でもあり、若かりし頃の私を受けた印象は強烈でした。

青木さんは、日本のオリエンテーリングの黎明期から指導的な役割を果たし、つい最近まで日本オリエンテーリング協会の理事として活躍されていたわけですから、オリエンテーリングとの関わりは40年にも及ぶかと思えます。

競技的には徒歩OLの時代から競技スポーツの時代まで、組織的には日本オリエンテーリング委員会の時代から日

本オリエンテーリング協会の時代まで、一貫して指導的な立場にあった唯一の方、それが青木さんでした。

競技の理論的基盤づくり

彼の最大の功績は、日本においてオリエンテーリングの競技像を構築する上で、理論的な基盤づくりをリードしたことだと思っています。自然の中で、すべての参加者が自分と同じ年齢、競技能力をもったライバルたちと競いあえる、そうした理想的な競技の姿を、マスポーツとして日本で定着させたい、青木さんはそう考えて、将来、マスポーツに発展したときに困らないようなルールやクラス分けなどの基盤づくりを推進させました。

おそらく、青木さんの心に底には、視察で訪れたスウェーデンのO-ringen大会で、何万人もの老若男女が数百のクラスに分かれて競い合うシーンが焼き付いていたのではないかと思います。それを目指すのが日本の現実に合致したものであったかどうかは意見が分かりますし、私自身はスウェーデンのようなオリエンテーリング大国の仕組みをモデルにするのではなく、イギリスなどの中堅国の仕組みを取り入れるべきだと、機会があるたびに青木さんに議論をふっかけていたのを覚えています。

しかし、第1回の全日本大会が開催（昭和50年2月）される前、昭和40年代後半には全国的、国際的な競技会が開催され、徒歩OLクラス（今で言えばトリムクラス）が中心であったとは言え、1万人規模の参加者がありました。それは当時でも北欧を除くと、世界最大規模のイベントでしたから、そうしたブームの先に、個人競技としてのオリエンテーリングに、若年層から高齢者までの多くの方が取り組むシーンを思い描いても、現実離れたものではなかったと思います。

明確なビジョンを持ち、それを実現するための理論的な基盤づくりを行うこと。物事を成し遂げようと思えば当たり前のことですが、それを継続して実践するのは容易なことではありません。日本のオリエンテーリングの導入期から一貫して、そうした役割を果た

した青木さんの功績は無比のものであり、わが身を省みる上で、1つの基準点を提示してくれた方でした。ご冥福をお祈りいたします。

（山岸倫也）